郷土の志士　池田梁蔵

東京ふるさと阿武町会幹事長
三浦　孝夫

NHK大河ドラマ「花燃ゆ」の低視聴率にもかかわらず、萩を訪れる観光客の数は増えているそうです。萩に人々の注目が集まるのは当然ですが、あの当時、長州藩は全藩一丸となって幕府と戦いました。われらが故郷阿武町とて例外ではなく、この地からも国事に奔走する憂国の士が生まれました。その人の名は池田梁蔵です。幕末維新の時代を「全力疾走した」（阿武町史）梁蔵の生涯をご紹介します。

天保４年柳尾生まれ

梁蔵は天保４年（1833)、奈古村畔頭（くろがしら）池田七郎右衛門の長男として柳尾に生まれました。江戸時代、奈古村は長州藩の支藩である徳山藩領でした。池田家は柳尾の豪農で庄屋に次ぐ地下役人を務めていました。勉学心旺盛だった梁蔵は長じて後、須佐・育英館督学の小国融蔵、さらには京都の儒学者・貫名海屋に学びました。小国融蔵は須佐の殿様、益田氏（当時の当主は親施＝ちかのぶ）の家臣で、19歳の時に江戸に遊学し、昌平坂学問所、安井息軒に学んで儒学を修める一方、単身、蝦夷地から樺太を訪ねて海防の方策を探ったといいます。嘉永４年（1851）に帰国して郷校・育英館の督学に迎えられました。梁蔵が学んだのはこの時かと思われます。小国融蔵は吉田松陰と交流があり、松陰が松下村塾を主宰していた時に、その塾生と育英館の学生が相互に訪問しあいました。このような中で学ぶうちに、梁蔵は尊王攘夷思想を育くんでいったものと思われます。

家督を弟に、国事に奔走

時あたかも、ペリーが浦賀に来航（嘉永６年＝1853)、翌年の日米和親条約の締結、安政５年（1858）の日米修好通商条約の調印で世の中は騒然としてきます。尊攘思想に目覚めた梁蔵はじっとしていることができず、家督を弟（耕之丞）に譲ると、国事に奔走します。「独り京師に遊び百方力を謁（つく）すなり」（墓碑銘)。

幕府が朝廷の許可を得ることなく日米修好通商条約に調印した直後に、吉田松陰が書き上げた献策「時義略論」の写本が池田家に現存します。「時義略論」は松陰が討幕を初めて明確に論じたものといわれ、その写本の伝世は梁蔵が討幕運動に傾倒していたことを今日に伝えています。

当時、攘夷運動の中心勢力となっていたのは長州藩です。桜田門外の変（万延元年＝1860)、坂下門外の変（文久２年＝1862）を経て、京都では天誅の嵐が荒れ狂い、文久３年（1863）にその運動はピークを迎えます。大和行幸の実行寸前に薩摩・会津藩によるいわゆる８・18のクーデターが起こり、攘夷派は京都から追放されました。長州藩は三条實美卿ら７人の公卿とともに都落ち（７卿落ち）を余儀なくされます。さらに失地回復を図った翌元治元年（1864）の禁門の変の敗退で、長州藩は朝敵となり、２度にわたる長州征伐を受けるなど危機的状況に追い込まれます。

江戸で探索、捕囚の身に

このように長州藩が苦境にあった時に、梁蔵はどうしていたのでしょうか。徳山藩は元治元年6月5日、梁蔵に江戸行きを命じます。この日は京都で池田屋事件がありましたが、梁蔵は江戸への途上、池田屋の悲劇を耳にしたことでしょう。「東京藩邸に潜み、以て時機を偵す」と墓碑銘は江戸での任務について記しています。反長州の幕府側の探索に当たったものと思われます。

ところで、藩命による江戸行きの前、すなわち文久3年（1863）秋から冬にかけて、梁蔵が江戸にいたことが彼の残した歌からわかります。「癸丑の年（1863）江戸にありけるころ、お願いごとのありければ、下野の方に赴くとて」との詞書に続いて「むさし野に吹きしく風のあらければ露のこの身の置くところなし」「むさし野に露のこころもおかれけり君がみおやのいかがますやと」の2首を詠んでいます。

京都での禁門の変における敗北で、梁蔵の江戸での探索は突然、終焉を迎えます。幕府が長州藩の江戸藩邸を破却し、在邸者を捕縛・投獄したからです。江戸藩邸の柱材などは風呂屋に売却されるなど幕府による破壊は徹底したものでした。捕縛された在邸者は120人にのぼり、そのうち50人が病没するという悲惨な捕囚生活を送りました。続いて支藩（長府、徳山、清末）・支族（岩国）の藩邸も没収され、在邸者は捕縛されたのです。梁蔵も囚われました。梁蔵ら徳山藩の在邸者は館林、安中、新見の3藩に預けられ、2年間にわたる捕囚生活を余儀なくされました。梁蔵が捕囚を解かれ、徳山に護送されたのは第2次長州征伐の戦いが始まる直前の慶應2年（1866）5月のことです。

再び江戸へ、秋元侯に弁ず

梁蔵とともに捕囚生活を送った徳山藩士に伊藤湊（みなと）がいました。伊藤は帰国後、奈古村と大井村で募集された農兵部隊「結草団」の総監に就任、わが郷土の農兵を指揮して戦いました。

一方、梁蔵は再び藩命を得て、江戸に向かいます。墓碑銘によれば「君侯祖先の墳墓を修し、且つ侯に謁し、秋元侯に弁じ、起居を得て還る。侯、その労を賞し、櫂て下士に班す」とあります。秋元侯とは、館林藩秋元家第10代藩主志朝（ゆきとも）のことです。志朝は徳山藩主元蕃（もとみつ）の実兄で、長州藩が京都から追放されて苦境にあった元治元年3月から4月にかけ、長州藩と幕府・朝廷間の斡旋に尽力しました。結局、これは実らなかったばかりでなく、志朝は幕府から長州との密通を疑われて、この年の10月27日、隠居を余儀なくされたのでした。

念願のロンドン行き

討幕の帰趨が決した慶應4年（1868）3月、徳山藩世子元功（もといさ）が英国留学に出発します。元功にはあの伊藤湊（矢島作郎と改名）が補佐役として同行しましたが、梁蔵はなんとこの船の船底に密かに潜り込んでいたといいます。元功に同行する伊藤湊をみて英国渡航の思いを抑えきれなかったのでしょうか。しかし、長崎で発覚して上海で下船します。上海で8カ月を過ごした後、ロンドンに向かい明治2年（1869）春、元功と再会を果たしました。ロンドン滞在はわずか半年余りでしたが、梁蔵は英国の進んだ工業技術に強い関心をもったようです。帰国した梁蔵は加俸され江戸藩邸吏員としての活躍が期待されていましたが、江戸に上る直前、徳山で病魔に襲われ、明治3年（1871）年11月6日、波乱に満ちた人生に幕を閉じました。なんとも惜しまれる最後でした。